

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 13 日現在

機関番号：23501

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21730636

研究課題名（和文）

日本におけるセクシュアル・マイノリティ教育の実態とその必要性・有効性に関する研究

研究課題名（英文）

Research on actual condition, necessity and effectiveness of education about sexual diversity in Japan

研究代表者

渡辺 大輔（WATANABE DAISUKE）

都留文科大学・文学部・非常勤講師

研究者番号：00468224

研究成果の概要（和文）：本研究では、ゲイの若者が自己を肯定する機会として、「仲間」であるゲイのネットワークに出会い、その中で経験的にこれまでの偏見を崩し自己を相対化することが重要であることを明らかにした。したがって、学校および教職員とこれらのネットワークの連携が緊急の課題であるとした。また、このネットワークは、子どもたちが「性の多様性」を理解するのに有効な授業を実施する際にも必要となることを、トロントおよびヘルシンキの教育実践も参照しながら明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This research revealed the following. For gay youth, in order to affirm himself, it is necessary to destroy his prejudice and relativize himself among some gay networks. Therefore, the urgent issue is to connect teachers and those sexual minority networks. In addition, those networks are necessary for effective education about sexual diversity.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2010年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：教育学

科研費の分科・細目：学校教育

キーワード：性教育・性の多様性・セクシュアル・マイノリティ

1. 研究開始当初の背景

（1）セクシュアル・マイノリティに関する教育を問題にする背景として、2004年から施行された「性同一性障害者の性別の取扱いの特例に関する法律」を境に性同一性障害や同性愛、インターセックス（半陰陽）などセクシュアル・マイノリティの存在が可視化してきたことがあげられる。それに伴い、彼ら彼女らが学校生活において直面しているさまざまな困難について少しずつであるが明らかにされてきた。また近年 HIV/AIDS 感染予

防対策として男性同性愛者・バイセクシュアル男性を対象に行われている調査では、当事者の若者の感染率が高まっている一方、それに対する教育は看過されており、またいじめやからかい、差別の被害を受け、彼らの自己肯定感も低く、自殺企図率が比較的高いという結果が出ている（厚労省調査など）。

（2）1980年代後半以降の日本の教育を問題にする背景として、この時期に HIV/AIDS が社会問題となり、その際に「同性愛=AIDS」

というイメージが付与されたことにより、性教育領域において HIV/AIDS 感染者・患者だけではなく、同性愛をはじめとしたセクシュアル・マイノリティの人権が問われるようになり、少しずつではあるが性教育に取り入れられるようになったことがあげられる。しかし具体的教育実践の収集・分析についてはほとんど行われていないのが現状である。

(3) 国際的には、セクシュアル・マイノリティに関する教育がカリキュラム化されているところは少なくない。これらの実践の紹介も日本では数少ない

2. 研究の目的

(1) 1980年代後半以降の日本の学校教育におけるセクシュアル・マイノリティの位置づけの変遷を明らかにする。具体的な性教育・人権教育の指針・方針、さらにセクシュアル・マイノリティに関する教育実践の具体的な内容の蓄積、その到達点を解明する。

(2) (1)での分析・考察を基礎に、それらの教育実践の課題と、セクシュアル・マイノリティ当事者にとっての有効性について、セクシュアル・マイノリティの生徒や教職員を対象とした調査、教育実践への参与観察など、質的調査の面から実証的に明らかにする。

(3) さらにセクシュアル・マイノリティに関する教育を既にカリキュラム化している諸外国の教育実践について、参与観察を含めた調査を行い、日本の実践と比較することで、現在の日本のセクシュアル・マイノリティの若者の実態に即した具体的教育実践の課題と展望を提示する。

3. 研究の方法

(1) 官製の資料や具体的教育実践を収集し、1980年代後半以降における日本のセクシュアル・マイノリティに関する教育の到達点を解明する。

(2) セクシュアル・マイノリティの若者および教職員、性教育に積極的にかかわる教職員などを対象とした半構造化インタビューを実施する。

(3) 外国の教育実践を参与観察や聞き取りによって調査を行う。

4. 研究成果

(1) ゲイの若者の現実と教育の課題

本研究では、ゲイの若者（現在20代前半）の経験から、彼らの抱える困難を抽出し、彼らを支援する方策を考察した。特に彼らが自己のセクシュアリティを受容するプロセス

における「仲間」（ネットワーク）の位置づけに注目した。また、学校の教職員への聞き取り調査により、学校現場の現状と課題を確認した。

①ゲイの若者への半構造化インタビューなどからわかったことは、現在の社会／学校のように、同性愛についていまだ偏見や差別、排除の恐怖がある中では、自分の将来を発展的に思い描くことが困難となることである。そのような状況で性の多様性を肯定する情報提供は非常に重要であるが、ゲイの若者に概ね共通してみられたのは、その情報だけでは自己を肯定的に捉え直すことができなかったことだ。彼らが自己を肯定できたのは、「仲間」であるゲイのネットワークに出会い、その中で経験的にこれまでの偏見を崩し自己を相対化できた時であった。しかしこのネットワークへの接続の機会是非常に個人の責任のもとにあり、誰もが安心して得られる機会となっていないのが現状である。

したがって、学校および教職員とこれらのネットワークの連携、特に若い世代が安心してアクセスできるようなネットワークづくりが重要なかつ緊急の課題となる。

②橋本紀子らによる調査（2006）では、全国の中学校教員のうち、「さまざまな性（性同一性障害、同性愛など）」に取り組んでいるのは10%未満である。性教育に積極的に取り組む教員らが集まる“人間と性”教育研究協議会でも「さまざまな性（性同一性障害、同性愛など）」に取り組む教員は27.5%にとどまる（田代美江子・良香織・渡辺大輔、2009）。

本研究の聞き取り調査では、学校内に「さまざまな性」の学習に積極的な教員が二人以上いることが、学校（または学年）全体に取り組みを広げていくには重要であることがわかった。

また、「さまざまな性」についての学習や、性の多様性を意識した日々の発言が必要であることは理解できていても、それに対して積極的に取り組むことができない理由として、学校内で日常的にセクシュアル・マイノリティの姿が見えないことが挙げられた。

しかし、そのような学習の機会や教職員からの言葉かけがなければ、現状の学校においてセクシュアル・マイノリティの子どもの存在が表面化することは非常に困難である。

これらの相互作用により、「さまざまな性」の学習やセクシュアル・マイノリティの子どもたちへの支援が進まないことがわかった。

以上より、教職員の学習機会の保障だけではなく、セクシュアル・マイノリティの存在が日常のものとして認識できるようなネットワークの形成が必要であることがわかった。

(2) 「性の多様性」理解のための授業のポ

イント

本研究では、中学校および高校における「性の多様性」理解のための授業を計画・実施する中で、子どもたちの理解に有効な授業に取り組む際の重要なポイントを以下のように提起した。

①教室に必ずセクシュアル・マイノリティがいるということを認識すること。そう考えると、学習の際の発問にも留意が必要であること。たとえばディベートのテーマとして、「同性婚の可否」、ましてや「同性愛者の存在の可否」などを設定することには大きな問題がある。当事者にとっては自分の存在や権利を誰かに判定されることになってしまうからである。「多様な性」の学習では、なぜ格差が生じるのか、どのような社会構造がそれを生み出しているのか、どのように社会構造を変えていけばいいのか、といったことにつながる視点の獲得が必要となる。

②映像資料やゲストなどで登場するセクシュアル・マイノリティが、すべてのセクシュアル・マイノリティの代表ではないということ認識すること。子どもたちは、映像に映し出される当事者やゲストと、テレビで映し出されるセクシュアル・マイノリティとの違いに驚き、そこに偏見のつくられる構造を見て取る。しかしセクシュアル・マイノリティといっても多様である。したがって、映像資料に登場する当事者やゲストが、「正しい」セクシュアル・マイノリティであるといった一面的な見方こそ、問い直さなければならぬ。

③「普通」とは何かを問う視点が重要性である。子どもたちはセクシュアル・マイノリティの当事者を見て、話を聞いて、「普通」「私たちと変わらない」という感想を述べるものがしばしばある。しかしここでの「普通」とは「心身に性別違和のない異性愛者」のことであり、そこを問わなければならない。「性の多様性」の学習では、自分自身も「多様性」の中のひとつであること、「普通」や「常識」とは何なのかを問う視点を獲得することが重要である。

④教職員自らが、自分自身のセクシュアリティや関係性を問い直し、さまざまなセクシュアリティの人とのネットワークをもつこと。ゲストを呼ぶにしても、教職員も初めて会う人と、教職員と日常的に関係性を持っている当事者を呼ぶのでは、子どもたちの受け取り方も大きく違う。後者の方が子どもたちも「身近な存在」として、すでに常に共に生きている存在として受け止められる。このように教師自身がネットワークを持つことが、教室に必ずセクシュアル・マイノリティがいるという認識(①)を強化することにつながる。

⑤授業においては「対話」の重要であること。

いわゆる「当事者」に語らせてしまう構造自体に問題意識を持ち、同じ空間にいるみんなと対話をしていく。この「対話」によって、「常識」や「思いこみ」を問い直し、同じ部分を持っていたり異なった部分を持っていたりする多様な人々が共に生きていく社会をつくっていける。したがって、子どもたちがゲストも教職員も含めて安心して対話ができる場を保障することが重要となる。

(3) 諸外国の教育実践

①トロントの教育実践

カナダで最大の都市トロントでは、家族の多様性、性の多様性を学習する「ヒューマンセクシュアリティプログラム」とセクシュアル・マイノリティの高校生のためのスクールプログラムである「トライアングルプログラム」が公的に提供されている。本研究でこれらについて新たに得た情報は以下の通りである。

・ヒューマンセクシュアリティプログラム

トロントではセクシュアル・マイノリティの人権は法的に保障されているものの、同性愛嫌悪的な文化や意識も根強く残っている。その中で、子どもたちは非常に幼い頃から「オカマっぼい」といったような言葉を耳にし、からかいの言葉として使っている現状がある。しかしそれに対し、問題意識を持つ教職員も増えており、小学校低学年段階からの授業の要望や相談が増え、授業の対象学年も拡大してき。

小学校低学年での授業では、「家族の多様性」をテーマとして扱っている。トロントでは法的整備が進むにつれ、実際に同性カップルで子育てをする家族など「新しい家族」の形態も増え、そのような家族をもつ子どもたちも学校に通っているためである。

低学年の場合は、『That's a Family!』(NEW DAY FILMS、アメリカ)や『Apples and Oranges』(National Film Board of Canada、2003年)といった視聴覚教材が多く使われる。その他、トロントでレズビアンカップルの親と生活する小学生の娘が、学校で自分のお母さんは二人だということを話したときに、どのようなことが起こるかといったことを描いた絵本なども教材として使われている。

このように、子どもたちの生活と社会の実態に合わせた家族や性の多様性についての学習が保障されている。

・トライアングルプログラム

「トライアングルプログラム」は、現在ではトロント教育委員会管轄の拡大もあり、生徒数も45名、専任教師も3名となり、一つだった教室も三つに増えた。第9学年から12学年の生徒を受け入れているが、もともとは高校の一部の単位しか履修できなかったカリキュラムが、現在では高校卒業資格を取れ

るように履修科目も増えた。生徒数の増大に伴って、ランチプログラムで昼食を提供してくれるボランティアや、チューターとして入ってくれるボランティアなども増えた。

プログラムの開設当初は、セクシュアル・マイノリティであるということによって自分の家にすらいられない子どもたちが多く通っていたが、スタートから15年経った現在は、親の意識も少しずつ変化し、子どものセクシュアリティを容認する家庭も増えてきたようである。しかし現在でもこのプログラムへの問い合わせは多く、学校でのいじめといった理由は今も昔も変わらない。

教科の学習の他、コーププログラムといった就労体験型学習なども取り入れている。受け入れ先として、セクシュアル・マイノリティのコミュニティにかかわる企業や、セクシュアル・マイノリティの従業員がいる事業所などに協力してもらっている。

このような学習を通して、セクシュアル・マイノリティの若者が、安心して社会およびコミュニティとつながり、自分の将来を展望していけるようになることが期待されている。

②フィンランドでの教育実践

フィンランドの首都ヘルシンキでは、フィンランドで最も大きいセクシュアル・マイノリティ支援 NGO である SETA が、教育省や地方自治体とも連携を取りながら、情報提供やユースワーク、研修や人材育成などさまざまな活動をしている。

SETA の重要な活動の中に学校への「多様な性」についての出前授業がある。多くは中学校、高校が対象であるが、たまに小学校からも依頼がある。1回45分から90分で、年間25～30校ほど訪問している。内容はセクシュアル・マイノリティ(当事者の経験談も含む)のことだけではなく、異性愛も含めた多様な性について、「男らしさ」や「女らしさ」の問い直しなども含む。

授業では、さまざまな性・人種・見た目の人々の写真を使い、これらを「男/女」を両極にしたライン上に並べさせて議論をするアクティビティや、さまざまなセクシュアリティの恋愛に関するショートストーリーを読んで話し合いをする、さまざまな立場(役)が書かれたカードを配って、その役になりきってロールプレイを行っている。ロールプレイの利点は、実際自分がどう思っているのかにかかわらず、役割になりきって発言できることであり、それによって、自分自身の考えを再考することにつながっている。

小学校では、多様な家族というテーマを扱う。パートナーシップ制度のあるフィンランドでは、実際に同性カップルに育てられている子どもが学校および地域社会に多くいる。多様なセクシュアリティをいきなり扱うよ

りも「家族」をテーマにした方が、小学校の教師たちも受け入れやすい。SETA では「多様な家族」が登場する DVD『Families in the Colours of the Rainbow』(2008)を制作・配布している。

(4) 今後の課題

以上の研究成果より、日本において現場の教職員をはじめとした学校および教育行政と、セクシュアル・マイノリティ支援グループとのネットワーキングが、子どもたちの理解を深めることに有効な「性の多様性」についての授業を積極的に行うことにおいても、教職員がセクシュアル・マイノリティの子どもたちに対応していくことにおいても、緊急に必要な重要な課題であると考えている。したがって、今後の研究では、学校現場の教員と協力し、そのようなネットワークの構築と、多様な性についての教材、教育方法の開発、授業実践を行い、実践のための教師支援のあり方の具体的課題と展望を明らかにする必要がある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計8件)

①渡辺大輔、セクシュアルマイノリティと教育、季刊セクシュアリティ、査読無、No. 44、2010、pp. 32-35

②渡辺大輔、性的少数者にとっての仲間との出会い、教育、査読無、779号、2010、pp. 61-67

③渡辺大輔、〈座談会〉ゲイの若者が語り合う、これまでとこれから、季刊セクシュアリティ、査読無、No. 49、2011、88-99

④渡辺大輔、フィンランドレポート① 多様な性の人権を考える SETA、季刊セクシュアリティ、査読無、No. 53、2011、pp. 138-141

⑤田代美江子、良香織、渡辺大輔、The Actual Situation of Sexuality Education in Japan and its Problem、埼玉大学紀要、査読無、第60巻第1号、2011、pp. 9-22

⑥渡辺大輔・楠裕子・田代美江子・良香織、中学校における「性の多様性」理解のための授業づくり、埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要、査読無、2011、第10号、pp. 97-104

⑦渡辺大輔、フィンランドレポート② 若者と共同プロジェクトを進める HIV 財団/HIV センター、季刊セクシュアリティ、査読無、

No. 54、2012、pp. 126-129

⑧渡辺大輔、フィンランドレポート③ 若者が自由に利用できるユースセンター “Happi”、季刊セクシュアリティ、査読無、No. 56、2012、pp. 146-149

〔学会発表〕（計1件）

①渡辺大輔、学校の中の性的マイノリティ
カナダの取り組みから日本の教育を考える、さらだ（セクシュアルマイノリティと人権を考える会）、2011年2月5日、RAFT

〔図書〕（計2件）

①ロリー・ベケット著、橋本紀子監訳、渡辺大輔他訳・解説著、新科学出版社、みんな大切！ 多様な性と教育、2011、195

②橋本紀子編著（渡辺大輔他著）、メディアファクトリー新書、こんなに違う！ 世界の性教育、2011、pp. 141-162

〔その他〕

①吉岡瑞代、学校の中の性的マイノリティ
カナダの取り組みから考える 渡辺大輔さんに聞く、しんぶん赤旗、2011年6月11日朝刊、11面

6. 研究組織

(1) 研究代表者

渡辺 大輔 (WATANABE DAISUKE)
都留文科大学・文学部・非常勤講師
研究者番号：00468224

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし